

サントリー音楽賞に吉原すみれさん
打楽器奏者の受賞は初めて

第11回(昭和54年度)サントリー音楽賞受賞者は3月3日東京・赤坂のサントリービルで開かれた選考会で、打楽器奏者の吉原すみれさんに決まった。同賞の女性受賞は、第9回の常森寿子さんオペラ)に次いで2人目。贈賞式は4月21日東京・丸の内の東京会館で行われる予定。

同賞は、日本のクラシック音楽の発展、向上に最も寄与した日本人に贈られるもので、賞金は300万円。選考方法は、今回から2段階(候補者選考会と受賞者選考会)に分けて実施された。

この日午前10時からの選考会には、芥川也寸志、宮沢縦一、吉田雅夫、大木正興ら11人の選考委員全員が出席。去る1月15日に、「サントリー音楽賞候補者」としてノミネートされた5人と1団体を対象に選考に入り、長時間にわたる慎重な審査の結果、吉原さんを選ぶことで全員の意見が一致、引き続き開かれた理事会で正式に承認された。

吉原さんは、昭和24年12月東京生まれ。昭和43年東京芸術大学打楽器学科入学。同47年ジュネーブ国際音楽コンクール打楽器部門第1位受賞。さらに各部門の優勝者の中から厳選される最優秀賞「プリ・アメリカン賞」、同52年には、ミュンヘン国際音楽コンクール打楽器部門で1位なしの2位に入賞。現在、欧州各地で活躍する一方、日本国内でも「アンサンブル・ヴァン・ドリアン」を結成するなど、現代音楽の紹介に力を注いでいる。

受賞理由は、委嘱作品を含む数多くの作品で、演奏者としてばかりでなく、作曲家との共同作業者としてきわめてすぐれた能力を発揮したことによる。とくに、昨年10月16日の「吉原すみれ打楽器リサイタル」で驚異的な技術と豊かな音楽性に満ちた演奏を聴かせたほか、6月のオランダにおける「ミデルブルグ現代音楽フェスティバル」でのリサイタル、9月のアテネにおける国際現代音楽協会音楽祭での湯浅譲二「舞働き」の初演など、海外における活躍ぶりが評価された。

受賞の知らせを聞いて記者発表開場に駆けつけた吉原さんは「とても信じられない心境です。候補者に選ばれただけでもびっくりしたほどなので、今もキツネにつままれたような気持ちです」と、微笑をたたえながらもいくぶん緊張気味の面持ちで喜びを語った。

なお、吉原さんは5月にベルリンとミュンヘンでリサイタルを予定している。

(写真説明) 受賞の喜びを語る吉原すみれさん(左)右は、佐治敬三理事長 以上